

接続詞に関する一考察

—「そこで」「それで」「だから」「すると」を中心に—

江雯薰(台湾・淡江大学)

1. はじめに

現代日本語における接続詞について、従来の研究の多くは前後文脈における論理関係からみるものであるが、時間という観点からみるものは管見の限りないようである。時間という観点からみると、「この時、その頃、…」のように同時性を表すものと、「そこで、それで、だから、すると、…」のように継起性を表すものがある。本発表は継起性を表す「そこで」「それで」「だから」「すると」(以下で四語と称する)を対象にして考察する。四語については、『日本国語大辞典(第二版)』(2002)では次のように説明されている。

「そこで」: [接続] ①前の事柄が原因、理由になってその後起こる事柄を述べることを示す。②話題を転じる意を示す。

「それで」: [接続] ①前の事柄を理由として、後の事柄を述べるのに用いる。②前の事柄を受けて、後の事柄を説き起こしたり相手の話をうながしたりするのに用いる。

「だから」: [接続] 先行の事柄の当然の結果として、後続の事柄が起こることを示す。

「すると」: [接続] ①前の事柄が成立したあとで、後の事柄が成立することを示す。②前の事柄が成立したあとで、それが原因・理由・動機となって後の事柄が成立することを示す。③前の事柄を根拠として仮定し、そこから、後の事柄が結論として導き出されることを示す。

このようにみると、四語は継起性だけでなく、原因、理由を表す接続詞としても用いられていることが言える。この四語の置き換えを手掛かりにして考察してみると、次の(1)の「それで」は「だから」には置き換えることができるが、「すると」「そこで」には置き換えられない。

(1) 「話、あるんでしょう？それで{*そこで／○だから／*すると}私のこと呼び出したんでしょう？」(女ざかり)

(1)をみると、四語には相違点があると思われる。本発表では、構文的に四語の共通点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

四語についての先行研究は多くあり、ここでは森田(1989)、石黒(2008)を取り上げることにする。

森田(1989)は、「そこで」について「「そこで」は「だから」とは違って、特に前後の文の間に深い「原因-結果」の関係がなくてもよい」とし、また「「そこで」は、ある場面や具体的な事態を前件に、その場面や事態から生起する次の事態を後件に立てる」ともしている。

「それで」について、「「それで」は「だから」と違って、原因や理由を積極的に示す意識ではない」としている。

「だから」について、「「Aです。だからBです」において、Bという事実の生ずる理由や原因をAで示すという発想」と述べている。

「すると」について、「「すると」を確定条件とするか、仮定条件とするかで、二つの意味に分かれる」とし、また「「すると」の「と」の性格から、前件が成立した場合、当然起こるべき結果が後件に立つ」ともしている。

石黒(2008)は「それで」「だから」「すると」を対象にして考察したものである。「それで」については、「「だから」のような、書き手の責任で因果関係を結びつけるものとは異なり、「そのため」と同様に対象そのものの論理によって結ばれる因果関係というところに特徴があります」と説明している。

「だから」については「先行文脈と後続文脈が原因-結果の関係にあることを明示し、それによって文章の説得力を高めるのが基本的な働きです」とし、また「因果関係を表す接続詞としてもっとも一般的な形式ですが、書き手が顔を出して、あらかじめ用意していた結論に強引に結びつけるような語感があります」ともしている。

「すると」について、「「発見」を表す「すると」は、誰の目から見ているかという視点が関わる文章、とくに小説では必要かつ有効な接続詞です。「すると」を使うことで、あたかも登場人物の目になったかのようにしてその場面を見ることができ、次に何が起こるのか、息をのんで見守るような効果があるからです」と説明している。

以上から、先行研究は主に四語を用いる文と先行文脈との論理関係を説明しているものであると言える。本発表では、先行研究に基づき、前後文脈における時間の前後関係、実現した事態を表すかどうか、後続文脈の意志性の有無といった観点から四語を構文的に考察し、それぞれの特徴を明らかにする。

3. 前後文脈における時間の前後関係といった観点から

時間の前後関係といった観点からみると、次のような特徴が見られる。

- A. 時間の前後関係からみると、四語の何れも継起的な関係と同時的な関係を表すことができる。但し、同時的な関係において、「そこで」「それで」「だから」が、時間関係だけでなく、因果関係も表すことができるのに**

対して、「すると」は単なる時間関係のみしか表せない。

- (2) 「お話してみて」未紀は顔のうえに帽子をのせたままいった。そこでぼくはあの日のことを、詳しく再現しようところろみた。(聖少女)
- (3) 「もう一曲唄って」と娘が催促した。それで私は『ホワイト・クリスマス』を唄った。(世界)
- (4) あなたが、それを私の口に放り込んだのだ。だから、私もお返しをする。(ガム)
- (5) 私は最も知りたかったことを直截に訊ねた。すると、内藤も気持がいいほどのストレートさで答えた。(一瞬)

(2)～(5)は四語の前後文脈が継起的な関係を表す例である。四語を用いる文の多くはこのような継起的な関係を表す場合であり、前後文脈の述語は「る」形と「た」形といった完成相で表す。それに対して、同時的な関係を表す場合は、次の(6)～(9)のように、前後文脈における文末の述語の語形が「ている」形か「ていた」形といった継続相で表す例が多い。

- (6) アゲハチョウは結局一晩で十八匹全部羽化してしまったので、挟い虫鉞はひらひらに羽ばたく蝶たちでもうまったく身動きできないようなありさまになっていた。そこで翌日の正午近くに、岳は二階のベランダに立って羽化したばかりのアゲハチョウを空に放った。(岳)
- (7) 相手は説得の調子でしゃべりながら声はこっけいなほどうわずっていた。それでぼくはいくぶん威厳をとりもどした。(聖少女)
- (8) 私は、その晩、他の男の視線を集めるだけで、その時の自分には、大変な贅沢だと思っていたから、望みなんて捨てていた。だから、半分、やけになって話し続けていたのよ。(ガム)
- (9) 君代はそっとドアを開けてみた。すると、菅はベッドからずり落ちるような恰好で眠っている。(影)

また前後文脈をみると、「そこで」「それで」「だから」((6)～(8))は時間関係だけでなく、何らかの因果関係も読み取ることができるが、「すると」((9))は時間関係のみを表す。

B. 継起的な関係の場合は、「そこで」「それで」「だから」は<先行—後続>も<後続—先行>も表すことができるが、「すると」は<先行—後続>のみを表す。

継起的な関係を表す場合は、前述の(2)～(5)で示したように、四語のいずれも<先行—後続>といった継起的な関係を表すことができるが、(10)～(12)のように「そこで」「それで」「だから」は<後続—先行>といった継起的な関係を表すこともできる。

- (10) 残された方法は、船便にたよる以外にはないのだが、たとえ主砲の大きさは収容できても、その異常な重さは、船体をたちまち破壊させてしまう。そこで、四六センチ主砲を長崎まではこぶために、特に設計

された砲塔運搬艦を新たにつくることになったのである。(戦艦)

- (11) 「実は私、来週引越しをする予定です。それで、部屋の中を色々整理してましたのよ。…(後略)…」(スメル)
- (12) やっぱり子供たちの顔を見て、「どうしてるの？頑張ってるね」と励ましたいでしょう。だから、財団事務所を自宅の離れにしたんです。(阿川1)

このような場合は、「すると」には置き換えられないが、「そこで」「それで」「だから」には置き換えができる、ということから、「すると」は先行文脈の事態が先に終わらないと、後続文脈の事態が起こらない、という制約があるが、「そこで」「それで」「だから」にはそのような制約がないと言える。

C. 「そこで」「それで」「だから」には前後文脈は時間関係を問わず、何らかの因果関係を表す場合があるが、「すると」にはそのような場合はない。

- (13) わしという考え方をしなくなれば、きみもかれもなくなる。つまり病人の顔がみな同じにみえてくる。区別は病気が重いか軽いかだけ。そこで金がなくても病気が重ければすぐ診てもらえることになる。(ブン)
- (14) 僕ね、スポーツがダメなんですよ。見るのもやるのも苦手、興味がないんです。だから、お相撲さんとか野球の選手とかは、似てるかどうか、自分では判定ができない(笑)。(阿川2)
- (13)(14)は、「そこで」「だから」の前後文脈には継起的な関係がなく、単なる因果関係で文脈の流れの中で結論に繋がる例である。「それで」の場合はこのような実例が見つからないが、(13)の「そこで」と(14)の「だから」を「それで」にすると、意味的に若干の差があるが置き換えられなくもないと思われる。このようにみると、継起的な関係がなく、単なる因果関係を表す場合には、「すると」は使用できないことが分かる。

以上のA～Cから、「すると」は、同時的な関係の場合は、単に時間関係を表すこと、継起的な関係の場合は<先行—後続>という前後関係を表すこと、時間関係のない場合は用いられないことで、「そこで」「それで」「だから」と大別されていると言える。また、「そこで」「それで」「だから」は「すると」より因果関係の読みが取れる、ということも言える。

4. 実現した事態を表すかどうか、といった観点から

後続文脈に意志、命令が来ることができかどうかをみると、「だから」を用いる文にはくることができ、「すると」「そこで」「それで」を用いる文にはくることができない。

- (15) 明日は試験だ。{*そこで／*それで／○だから／*すると}、今夜は早く帰ろう。(作例)
- (16) 明日は試験だ。{*そこで／*それで／○だから／*すると}、今夜は

早く休みなさい。(作例)

意志、命令は未実現の事態を表す表現である。(15)(16)から、「だから」は未実現の事態を表すことができるが、「そこで」「それで」「すると」は未実現の事態を表さないとと言える。また、

(17) 明日は試験だ。{*そこで/○それで/○だから/*すると}、今夜は早く休む。(作例)

(17)の「休む」は発話時以降実現される事態であるが、話し手にとっては確実に実現できることなので、実現した事態と見なすことができる。こういった場合に用いられるのは、「それで」「だから」である。

以上から、「すると」「そこで」は実現した事態を表さなければならないが、「それで」はそれに加えて、話し手にとっては確実に実現する未来の事態でも表すことができるとと言える。それに対して、「だから」は実現した事態も未実現の事態も表すことができる。

5. 後続文脈の意志性の有無といった観点から

後続文脈の意志性の有無に関する考察については、杉本(1997)の動詞の観点からみた枠組みを援用したものである。四語が用いられる文には、「それで」の例をたとえに挙げると、意志性を持つもの((18))もあれば、意志性を持たないもの((19))もある。

(18) 医者は短命宣言をしたし、家族も覚悟した。そこでまわり中が彼女をちやほやと甘やかし、母親は労を惜しまず日本中の病院に付き添い、少しでもつぐみの寿命を延ばそうと力をつくした。(つぐみ)

(19) 不調の兆候が起っても洪水はやまなかったのだ。そこで販売課の焦躁、製造課の徒労にくわえて宣伝課にはヒステリーが発生した。(王様)

四語を用いる文に意志性があるかどうかをみると、次の〔表1〕になる。

〔表1〕

後続文脈 接続詞	意志性あり	意志性なし	合計
すると	171 例(68.4%)	79 例(31.6%)	250 例
そこで	217 例(82.82%)	45 例(17.18%)	262 例
それで	204 例(68.23%)	95 例(31.77%)	299 例
だから	128 例(60.09%)	85 例(39.91%)	213 例

〔表1〕から、四語を用いる文の多くは、意志性を持つものであり、そのうち「そこで」は他の三語より動作主が人間である場合によく用いられると言える。

6. まとめ

これまで考察してきたことから、四語は継起的な関係も同時的な関係も表す

ことができること、実現した事態を表すこと、後件の多くは意志性を持つことで共通している。それに対して、「すると」は同時的な関係の場合は、単に時間関係を、継起的な関係の場合は<先行—後続>という前後関係を表すこと、時間関係のない場合は「すると」を用いられないこと、「そこで」「それで」「だから」は「すると」より因果関係の読みが取れること、「それで」は話し手にとっては確実に実現する未来の事態でも表すことができること、「だから」は未実現の事態も表すことができること、「そこで」は、他の三語より、動作主が人間である場合によく用いられるという点で異なっていると言える。

参考文献

- 石黒圭(2008)『文章は接続詞で決まる』、光文社新書。
- 市川保子(2000)『続・日本語誤用例文小辞典—接続詞・副詞—』、凡人社。
- 杉本和之(1995)「意志動詞と無意志動詞の研究—その1」、『愛媛大学教育学部紀要』28-3、愛媛大学教育学部。
- (1997)「意志動詞と無意志動詞の研究(2)」、『愛媛大学教育学部紀要 2 人文・社会科学』29-2、愛媛大学教育学部。
- 萩原孝恵(2006)「「だから」と「それで」と「そこで」の使い分け」、『群馬大学留学生センター論集』第6号。
- ひげひろし(1997)「接続詞のはなし(4)—「それで」と「そこで」」、『教育国語2・24』、むぎ書房。
- (1987)「「それで」「だから」「したがって」」、『教育国語88』、むぎ書房。
- (1997)「接続詞のはなし(5)—「だから」」、『教育国語2・26』、むぎ書房。
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店。
- グループ・ジャマシィ(1998)『日本語文型辞典』、くろしお出版。

使用テキスト

阿川1 = 阿川佐和子『阿川佐和子のこの人に会いたい』(文春文庫)文藝春秋(1997)、阿川2 = 阿川佐和子『阿川佐和子のアハハのハ』(文春文庫)文藝春秋(1999)、一瞬 = 沢木耕太郎『一瞬の夏』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、王様 = 開高健『パニック・裸の王様』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、女ざかり = 森瑤子『女ざかり』(角川文庫)角川書店(1994)、岳 = 椎名誠『岳物語』(集英社文庫)集英社(1986)、影 = 夏樹静子『影の鎖』(集英社文庫)集英社(1977)、ガム = 山田詠美『チューイングガム』(角川文庫)角川書店(1994)、スメル = 原田宗典『スメル男』(講談社文庫)講談社(1992)、聖少女 = 倉橋由美子『聖少女』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、世界 = 村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、つぐみ = 吉本ばなな『TUGUMI つぐみ』(中公文庫)中央公論社(1994)、花埋み = 渡辺淳一『花埋み』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)、ブン = 井上ひさし『ブンとフン』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社(1995)。

<付記> 本発表は103年度台湾科技部研究計画の成果の一部である。